

社会的養護の退所者が居場所に求めているもの

田中 禮子

A study of the needs of young people after leaving care facilities

Reiko TANAKA

Abstract

Young people who have been supported at the care facilities usually have to leave them when they reach a certain age of independence. These young people have started groups in order to speak out for the improvement of their living situations. Each of these associations has its own aim, but what is common among them is the will to attain a secure place to live.

The goal of this paper is to find what these groups really want in their living conditions. Through books and the newsletters from three associations, I have pieced together what has happened to them. I also interviewed and observed parties involved and their supporters.

My study revealed the following. These young people want to have a place to live where they are psychologically and materially supported. In addition they would like to have a sense of belonging to their own community. Thirdly, they need a safe place to which they can always return. These aspects were listed by people who need further support from care facilities. The study also made clear how important it is that caregivers reside at the care facilities at all times.

Key words : care facilities, a place to live, a sense of belonging to a community, to attain a secure place to live

キーワード : 養護施設, 居場所, 生活の共同感, 場所の継続的安定的確保

I 問題の所在

1 社会的養護の退所者の現況と課題

社会的養護とは、何らかの事情により、家庭で養育されることのできない子どもを国や地方公共団体が家族に代わって養育すること、そしてそのしくみのことをいう。具体的に示せば、乳児院、児童養護施設、自立援助ホーム、児童自立支援施設、情緒障害児短期治療施設などの入所施設や、里親の下でこ

れらの子どもを養育することである。また、社会的養護の退所者とは、前述した施設や里親の下を退所あるいは委託解除され、自立して生活することを求められている者のことをいう。厚生労働省「平成19年度社会的養護実態調査結果」によれば、前述した児童福祉施設在籍人数は43423人で、里親委託児は3633人である。また、厚生労働省「平成19年度児童養護施設等調査」(平成20年2月1日)によれば、

これらの施設への入所（委託）理由は、子どもの問題によるものは少なく、家庭環境によるものが大部分を占めている。児童養護施設の場合は、子どもの問題は3.3％、親の問題は53.1％、虐待は33.1％、その他は8.2％である。そしてまた、全国児童養護施設協議会「平成17年度児童養護施設入所児童の進路に関する調査」（平成17年4月1日）によれば、児童養護施設退所児の内、家庭に引き取られる割合は18.7％であり、退所した大部分の子どもが衣食住を自分の収入で賄い、自立した生活を余儀なくされている。

彼らの退所後、あるいは委託解除後の生活については、社会的・経済的自立とともに日常的な支援の必要性が重要な課題となっている¹⁾。それは、職業生活以外の休養したり、楽しんだり、友人と交際したり、地域行事に参加するなどの私的な生活への助言や、日常あるいは仕事上のトラブルや失敗などの解決や相談などの支援である。これらは、家族が日常的に担っている役割である。これについて、社会保障審議会児童部会社会的養護専門委員会報告書「社会的養護体制の充実を図るための方策について」（平成19年11月29日）には、「社会的養護の下で育った子どもは、施設等を退所し自立するに当たって、保護者等から支援を受けられない場合も多く、その結果様々な困難に突き当たることが多い。」と述べられており²⁾、施設等を退所したものの誰からも支援を得られない子どもの生活の不安定さがうかがえる。

Ⅱ 居場所について

1 居場所の定義

後述するように不安定な生活を余儀無くされている退所者がかかわる団体は、いずれもその活動目的に居場所活動をあげている。居場所とはどのような場所であろうか。子育て環境研究所の杉山千佳は、居場所を「自分らしくいられる場所」だとし、「こ

の場にいる・いない・何をする・しないの自由は『私』にあるということであり、仮にこの場になくても『あなたの席は設けられている』状態であることが居場所には必要³⁾だと説明している。居場所とはありのままの自分の存在がそこに当然のこととして受け入れられる場所だということであろう。心理学者である高塚雄介は居場所を「空間的な『居』場所と時間的な『居』場所がクロスする所」であり、ここでは「関係性の有無によって意味づけ」がなされ、それによって、「人は自らが存在していることの証し」を確保していると述べている。そして、空間と時間がクロスする所が物理的な居場所であり、人間は物理的な居場所を確保するよりも心理的な居場所の確保にさまよい続けていると説明し⁴⁾、心理的な居場所の重要性を強調している。萩原建次郎は社会教育学の立場から、居場所について以下のようにまとめている。①居場所は「自分」という存在感とともにある。②居場所は自分と他者との相互承認という関わりにおいて生まれる。③居場所は生きられた身体としての自分が、他者・事柄・物への相互浸透的に伸び広がっていくことで生まれる。④同時にそれは世界（他者・事柄・物）の中での自分のポジションの獲得であるとともに、人生の方向性を生む⁵⁾。

以上は、それぞれの異なる立場からとらえた居場所の定義である。

筆者は、社会福祉の立場から、居場所を生活との関連でとらえ、糸賀一雄の実践に見られるように、特定の人（1人あるいは少人数）との人間関係を通じて個人として理解され、無条件に受容され、必要とする具体的な生活支援が日常的、継続的に得られる場所であるととらえている。

以下は、駐在所に保護された千代子（8歳）を職員が引き取ってきたときの記述である。

千代子は2階の大広間の子どもたちの部屋の大火鉢の前に座ったきり、白い眼をむいてテコでも動かなかった。そのうち座ったまま小便をして着ていた着物の裾をぐじゃぐ

じゃにして泣き出した。「痛い痛い」というのである。

むりやりに医局に運びこんで本原さんが診察すると陰部がひどくただれていた。くわしく調べた結果、千代子は先天性の梅毒に冒されていることがわかった。病院に送り込んだ方がよいのではないかという私たちの話をきいていた若い保母さんが、「もしさしつかえなかったら、わたくしにこの子の面倒をみさせてください」と申し出た。「病院で病気はなおるでしょうけれど、この子は心を病んでいるのです。病院ではそれはなおらないでしょう。私たちにやらせてくださいませんか」というのであった。……そこで本原さんの指導で足立さんというその保母は、千代子の看病にあたることになった。千代子は何週間も笑顔を見せたことがなかった。……いつも三白のうわ眼づかいで、かわい気というものがなかった。どんな親切も素直にうけとるということがなかった。よっぽどひねくれていたのである。しかし足立さんはこの子を愛した。ただれた患部に素手で薬を塗ってやり、1クール、2クールと忍耐づよい闘病生活をつづけた。……ある日千代子が足立さんの呼びかけに、はじめて、小さいけれどはっきりと「ハイ」という返事をして、はにかんでニーツと笑ったのである。……それから今度はまるで薄紙をはぐように、千代子の顔があかるさを増し、言葉が増え、足立さんとなら、いっしょに廊下を掃いたり拭いたりできるようになってきた。ある日のこと、「千代ちゃん、大きくなったら何になるの」と足立さんがきくと、千代子は、「うち、保母さんになるんや」といって、にっこり笑った⁶⁾。

2 居場所にかかわる先行研究

居場所について、1980年代以降、多くの研究がなされてきた。心理学領域では、居場所を失った、あるいはそう感じている人への援助⁷⁾や青年期の心理的な離乳、親からの自立のための心理的基地の必要性⁸⁾などの研究がある。また、居場所（心理的居場所）には、「ほっとする」、「落ち着く」、「安心する」などの安心感⁹⁾、「自分らしくいられる」「自分が自分である」などの本来感¹⁰⁾、「ありのままの

自分が受け入れられる」という被受容感¹¹⁾、「必要とされている」「役に立っていると思える」などの有用感¹²⁾などの感情が関係しているとの研究もある。社会福祉領域では、セルフヘルプ・グループの研究がある。セルフヘルプ・グループ活動は、メンバーにとって何らかの利益があり、見返りがあり、役に立つ活動だと A.H. カッツは言う。問題に対する見方を変えたり、日常的で手段的な情報やアドバイスを受けたり、情緒的サポートを得たり、個人的な事情を開示したり、孤立を克服できたり、一緒に行動したり、エンパワーメント・自己信頼・自尊心の回復ができたりすることへの援助が受けられると言う¹³⁾。また、久保紘章はセルフヘルプ・グループは、メンバーのアイデンティティの再建や自尊心の改善、実用的・実践的な体験的知識の利用、力の獲得などの機能をもち、さらに従来の専門的組織や専門的援助を問い直すという機能もあると述べている¹⁴⁾。

杉岡直人は、身近な場所にたまり場のような居場所は、地域住民の誰にとっても必要だと指摘している。高齢者、障害者、子育てをしている親などが立ち寄り、多様な関係を創り出すことができる小規模で多機能を併せ持つ地域の拠点が重要だと述べ¹⁵⁾、また、網野武博は、「人々との深いかかわりをどこかで軽んじ、何気なく避けがちな、ぬくもりのない無機質なおいを社会に、政治に、経済に、教育に、福祉に、医療に、そして地域に、家庭の内に見出す」ことを懸念し、「人間としてぬくもりのあるかかわりの再生を」と呼びかけている。そしてまた、現在は、「そのようなかかわりをもつためには、それを求めてよすがとなる居場所探しにエネルギーを注がなければならない状況」にあると言う¹⁶⁾。これは、社会の中に自分の居場所を見出すことが、誰にとっても切実で困難な課題になっているということだろう。

Ⅲ 社会的養護の退所者が居場所に求めているもの

Ⅱでは、様々な居場所に関わる知見を述べた。しかしながら、日本では、これまでに社会的養護の退所者のかかわる当事者団体を対象とした研究は少なく、社会的養護の退所者がどのような居場所を求め、それをどのように得ようとしているのかについては明らかになっていない。現在、社会的養護の退所者がかかわる団体は、日本に5団体ある。大阪市の“C V V” (Children's Views&Voices)、東京都の“日向ぼっこ”、千葉市の“こもれび”、名古屋市の“なごやかサポートみらい”、鳥取市の“ひだまり”である。本稿では、そのうちの3団体、“C V V”、“日向ぼっこ”、“ひだまり”の活動を資料により検討し、このことについて調べることにする。

1 団体の概要

各団体の概要については、(表Ⅰ)の通りである。ここに示した3団体は、立ち上げのきっかけも、組織形態や団体の運営体制も、活動状況も、支援者との関係も異なっている。共通しているところは、社会的養護の退所者が生活支援を目指していること、居場所作りを重要だと考えていること、居場所で夕食を希望者に実費で提供すること、生活問題に関する助言や支援をすることなどの4点である。

“C V V”は、退所者と支援者がともに協力して運営をしており、民間企業の助成金や支援者の会費、寄付等が主な活動資金である。いわば、退所者と支援者による退所者のための活動である。

“日向ぼっこ”は、退所者の会費、支援者の会費、補助金、寄付金等を主な活動資金とする当事者団体で、退所者が当事者として運営し、NPO法人の認可を得て地域生活支援事業のモデル事業を受託して活動している。いわば、退所者による、退所者のための活動である。

“ひだまり”は、地域生活支援事業のモデル事業を社会福祉法人鳥取子ども学園が受託したのを契機

として立ち上げられた団体で、運営は法人の職員である相談支援員が行い、相談支援員が退所者の活動を支援するという体制である。活動資金は、補助金、賛助会費、寄付金等である。いわば、相談支援員による退所者のための活動である。

以下はそれぞれの団体が発行する通信紙の記述である。これらには、団体の特徴がよく現されている。

「みんなの手紙」

(C V Vニュースレター第8号2008年10月19日発行)

CVVは、児童養護施設で生活をしている中・高生や、そこを退所した若者たちの居場所活動を行うグループです。CVVという名称には、子どもたちの視点(Views)や声(Voices)を大切に、施設での生活や退所後の生活をよりよくしたい、という思いが込められています。CVVの活動に参加してくれた人たちが安心でき、人とのつながりを実感し、エンパワーメントされる居場所であることを大切にしています。また、施設で生活した経験のあるメンバーからの等身大の情報を発信することで、子どもの権利、児童養護を含む社会的養護の実態やあり方についての社会的啓発を行い、一人ひとりが大切にされる社会の実現を目指しています。

「日向ぼっこ通信」(NO. 57 2009年9月号)

私たち特定非営利活動法人社会的養護の当事者参加推進団体「日向ぼっこ」は社会的養護の当事者参加の実現やネットワーク創りをめざすべく集まった当事者グループです。2006年春の結成以降、例会・運営会・勉強会の他、児童養護施設職員の研修会でお話ししたり、学会・研究会などで発表を行っています。2007年度から、児童養護施設を退所した人達が気軽に集まれる場所「日向ぼっこサロン」を開設しました。また、2008年7月末にNPO法人として認可をうけ、8月からは東京都の「ふらっとホーム事業」を受託しています。2009年4月に湯島に移転しました。施設を退所した人がその後孤立してしまわぬよう、私たち当事者の声が政策や現場で取り入れられるように、また当事者が援

(表 I) 団体の概要

団体名	(1) 日向ぼっこ (NPO法人)	(2) CVV (任意団体)	(3) ひだまり (地域生活支援事業)
代表者	W. S. (退所者)	N. M. (退所者)	H. K. (児童養護施設協議会長)
所在地	東京都文京区湯島	大阪市東成区鶴橋	鳥取市立川町
開設日	2007.4	2001.6	2008.10.1
目的	①居場所活動(居場所の提供) ②サポート活動と相談事業 ③社会的養護の下で育った当事者の声を広く知らせる	①居場所活動(居場所の提供) ②子どもの権利と社会的養護の啓発	①居場所活動(退所者自助グループの育成) ②生活・就業に関する相談と支援
組織	理事長1名,副理事長1名 理事7名,職員3名(すべて正会員) 正会員(退所者)	会長1名,副会長1名,会計1名 (ユース会員の互選) ユース会員(退所者) サポート会員(支援者)	代表1名 相談支援員2名
運営費	会費(正会員) 賛助会費(経済的支援者) 補助金(ふらっとホーム事業費) 寄付金, その他	会費(サポート会員) 助成金(民間団体) 寄付金 その他	補助金(地域生活支援事業費) 賛助会費(経済的支援者) 寄付金 その他
活動日	月火木金土 16～21時 日 11～17時	「よりみち堂」18～21時(月1回) 「みんなの会」10～15時(月2～3回)	日月水木金土 11～21時
活動内容	相談事業 居場所(サロン)活動 研修会・講演会・コンサート 書籍の出版・通信紙発行 その他	中・高校生交流会「みんなの会」 居場所活動「よりみち堂」 講演会・学習会・シンポジウム ニュースレターの発行 カナダPARCとの交流 その他	生活,就業相談 居場所活動 食事会, 誕生会, スポーツ大会, 陶芸教室などのイベント リーフレット作成 その他
特徴	当事者活動(セルフ・ヘルプグループ) 政策提言(社会的アドボカシー) NPO法人	退所者と支援者の共同活動 退所者だけでなく入所中の中・高生の居場所活動 カナダPARCとの交流 子どもの視点からの発言(セルフ・アドボカシー)	鳥取県児童養護施設協議会からの委託事業 相談支援員中心の支援活動 退所者の自助グループの育成
きっかけ	大学内で施設経験者4人が出会い,当事者グループ必要性を痛感してグループを立ち上げた。	児童養護施設に入所中の子どもがカナダPARCを訪問し若者と交流して衝撃を受け, 帰国後子どもたちが集まりCVVを発足させた。	厚生労働省地域生活支援事業のモデル事業として発足した。
資料	通信紙「日向ぼっこ通信」 「社会的養護の下のケアを考える会」記録 NPO法人社会的養護の当事者参加団体日向ぼっこ編著『「日向ぼっこ」と社会的養護』2009 明石書店	「CVV・PARC交流事業報告書」 ニュースレター「みんなの手紙」	通信紙「ひだまりだより」 「鳥取子ども学園要覧」

PARC*(People Adolescent Resource Center:カナダの社会的養護のもとで育った若者たちを支援する組織)

助者に転換できるような政策の提案や具体的取り組み・ネットワーク創りを目標としています。

「ひだまり」（第1号 2008年11月8日）

鳥取県児童養護施設等退所児童支援体制整備（地域生活・自立支援）事業「地域生活支援事業ひだまり」がスタートしました。この事業は、児童養護施設などを退所した人たちや里親の下を離れた人たちが、社会的に自立した生活ができるよう、様々な支援を行う相談事業です。厚生労働省が依頼した全国五カ所のモデル事業の一つとして、鳥取県児童養護施設協議会に委託されました。・・・ひだまりの行う支援事業の内容と活動の様子を紹介します。

気軽に立ち寄ることができるスペースを作りました。自助グループ活動を展開します。生活の相談に応じます。仕事などの相談に応じます。自立に役立つ、リーフレットを作成します。

2 重要視される居場所活動

先に紹介したニュースレターや通信紙を見ると、「CVV」は、「活動に参加してくれた人たちが安心でき、人とのつながりを実感し、エンパワーメントされるような居場所」。「日向ぼっこ」は、「児童養護施設を退所した人達が気軽に集まれる場所」。「ひだまり」は、「気軽に立ち寄ることができるスペース」と、それぞれ表現は異なるが、どの団体も居場所作りを重要視していることがうかがえる。

「CVV・PARC 交流事業報告書」には、次のような記述がある¹⁷⁾。

CVVが活動していく中で見えてきたこと、またこの事業を準備する中でいろいろなことができました。まず、居場所であることが大事であることが認識されてきたことです。居場所とは、施設で暮らしてきた人たちが安心して集える場所や機会を作ることがまず大事なんだ、ということが明確にみえてきました。じゃあ、どんな居場所を作っていったらいいのかというのが次のステップです。

3 退所者が求める居場所

このように、それぞれの団体が重要視している居場所活動であるが、退所者は具体的に何を求めて、どのようにそれを得ようとしているのだろうか。このことについて、筆者は各団体の概要の資料欄にあげた各団体の通信紙、報告書、出版書及び筆者が団体を訪問した時の様子などを検討し、以下のように整理した。

これらの項目は、一つの活動の中に複雑に混じり合い、相互に絡み合っているため、一つの独立した項目として取り出すのは難しいが、敢えて、居場所に求める項目として分類した。それは、①情緒的な支援、②日常的・手段的な生活支援、③生活の共有感、④解決すべき課題や取り組みへのエンパワーメント、⑤安定した存在場所と良好な人間関係の確保

これらの項目は「児童養護施設退所児童の追跡調査（2002年10月1日）」（東京都社会福祉協議会児童部会研究調査部2004）の結果との一致点が見出せる¹⁸⁾。

それでは、これらの項目を退所者はどのようにして得、それをどのように表現しているのかを、「ハローノート¹⁹⁾」（「日向ぼっこ」の訪問者記録）の記述、「CVV・PARC 交流事業報告書」「CVV ニュースレター『みんなの手紙』」の記述で明らかにする。

（1）情緒的な支援

もっとも求められ、そして提供されているのが心理的支援であった。どの団体にもこのことに関連する記述がある。そこには、先行研究で明らかにされているように、安心感、本来感、被受容感、有用感の充足がうかがえる。

①安心感

安心とは、心が落ち着いてゆっくりとくつろいでいる様子を表す。施設経験者であると特別視されることもなく、周りに気を遣うこともなく、あるいは自分自身に不安を感じないでおれるということであろう。

12月某日「自分と同じ施設出身者の方と出会えてうれしかった。18歳で施設を出てから、一人で社会に出て“生きづらさ”をかかえていた。また皆さんと交流していきたいと思っています」(Oさん/20代女性) (「ハローノート」“日向ぼっこ”訪問者記録)

②本来感・被受容感

本来感とは、自分が自分らしく居ることができる、取り繕わない自分で居れるという感じを抱けるということであり、被受容感とは、自分が受け入れられているという感じを抱けるということである。“CVV”ではこのことについて、「参加するそれぞれの人にとって、CVVでは等身大で自然体の自分である居場所であることを継続していきたいと思っています。」と述べている²⁰⁾。

“日向ぼっこ”の訪問者は次のように記述している。
7月某日「さゆり代表と激しく言い争いました。だけど、その後関係にひびが入らないのが日向ぼっこのいい点かな」(Mさん/30代男性) (「ハローノート」“日向ぼっこ”訪問者記録)

3月某日「今日もとにかく楽しく笑いのたえない時間、あっという間でした。新しい出会いも来る度にあり、真面目な話もしたし、人間とふれあう楽しさを実感しました」(Hさん/30代男性) (「ハローノート」“日向ぼっこ”訪問者記録)

9月某日「話に聞いているのと訪問するのでは大違いだったかも。来てみてよかったです。自分の気持ちを率直に出せる場は望んでも簡単に得られるものではないので、こういう場は大変貴重だと思いました。今日はどうもありがとうございました」(Mさん/30代女性) (「ハローノート」“日向ぼっこ”訪問者記録)

これらの記述から、当事者が本来感・被受容感を得ることができる根底には、他者を尊重する、対等で受容的な人間関係があることがうかがえる。

③有用感

有用感とは、自分が他の人の役に立っている、あるいは自分も役に立っていると認められているという感じを抱くことである。

7月某日「今日ははじめて料理をひろうしました。喜んで食べてもらうってとてもうれしいことですね。それと、私も教員採用試験の1次を無事終わりました。ほんとうに皆さんのおかげです。これからはもっと積極的に日向に関わっていけるように頑張るぞ」(Sさん/20代女性) (「ハローノート」“日向ぼっこ”訪問者記録)

この記述からは有用感とともに自分の解決すべき課題が見つかり、パワーを得た喜びがうかがえる。

(2) 日常的・手段的な生活支援

日常的・手段的な生活支援とは、日常的に生起する生活問題などの解決に向けて、情報を交換したり、アドバイスをし合ったり、具体的に助け合ったりして、支え合うことをいう。以下は、活動に参加している支援者(サポート会員)の記述である。

今日はCVVのメンバーを含め、当事者のメンバーが6名集まりました。初めてきてくれた卒業生もいて、わいわいと話が弾みました。ごはんを食べ終わった後、1時間くらいテーブルを囲んで、当事者メンバーが中心になって職場での人間関係について、それぞれの体験や思っていることを熱く語り合っていました。人間関係について、繊細なためになかなか言い出しにくいと思っている人に具体的にどんな風にしてみたらどうか、というような具体的なアドバイスや、自分はこんな風にしてきたよ、といった話などがなされていました。(しま)(ニュースレター「みんなの手紙」第10号2009年4月24日金)

この記述からは自然な交流の中で身近な相互支援、いわゆる井戸端会議風の交流や支援が行われている様子がうかがえる。

(3) 生活の共有感

「同じ釜の飯を食う」という言葉があるように、生活を共有するということは情緒的なつながりを深めることに繋がる。衣食住は生活の基本である。これら3つの団体では、「食」の提供をし、日常的に「夕食」をとともにしながら集い、交流を深める場を大切

にしている。自分自身を表現し、楽しみながら他の人とかかわることのできる機会の提供である。

またこれは、家庭生活の経験の少ない施設退所者への生活技術や社会的活動への支援でもあり、将来の家庭づくりに向けての模擬体験の機会の提供でもある。

6月某日「初めてお邪魔しました。Bさんのレバニラめっちゃおいしかったです。シーザーサラダ&ポテトサラダ・かき玉おみそ汁・・・みんなみんなおいしかったです。「夏雲あがれ」(やまとっちが脚本を書いた大河ドラマ)もさわやかなドラマで、皆で見れたのもうれしかったです」(Mさん/30代女性) (「ハローノート」「日向ぼっこ」訪問者記録)

8月某日「今日は24回目の誕生日を皆に祝ってもらいました。日向ぼっこに会えいろんなことを考えました。これからも自分を成長させていきたいと思います。皆さん本当にありがとうございます!!」(「ハローノート」「日向ぼっこ」訪問者記録)

12月某日「年末なのでおせちの買い出しに行きました。いろいろ買い物したので正月が楽しみです。明日は大掃除頑張ります」(Mさん/20代) (「ハローノート」「日向ぼっこ」訪問者記録)

2009年1月某日「今日はみんなで新井薬師に行きました。おみくじは吉でした。Mは大吉でした。今年も良い事が沢山有りますように。帰りに公園に行ってシャボン玉をしました。とても嬉しそうに遊んでしまいました。今日も良い日でした」(Iさん/20代) (「ハローノート」「日向ぼっこ」訪問者記録)

これらの記述から、従来ならば家族に求められる食事の提供、レクリエーション、休養、生活行事や社会生活の方法などのインフォーマルなサポートがなされていることがうかがえる。

(4) 解決すべき課題や取り組みへのエンパワメント

自分が理解された、受け入れられたと感じ、自分で自分自身のことが整理でき、表現できるようにな

ると、「一人だち²¹⁾」の課題が浮上する。自分で自分の方向を決めて、自分の課題に取り組む準備を始めるとのことである。

2月某日「今日は勉強をけっこうまじめにしました。都立のテストをしました。国語41点でした。トマトがくさっていました。こんな僕ですが、将来頂点に立ちます」(T君/10代男性) (「ハローノート」「日向ぼっこ」訪問者記録)

CVVの活動においてなにより大切にしていることは、参加した子どもや若者たちが安心でき、人とのつながりを実感でき、自らの力を回復させ引き出すことのできる、つまりエンパワメントされる居場所であることです。また孤立感が深く、他者へ助けを求めない傾向のある若者たちに対して、活動を通して「当事者同士の縦と横のつながりを生み出すこと」を大切にしています²²⁾。(「CVV・PARC 交流事業報告書」)

(5) 安定した存在場所と良好な人間関係の確保

訪ねればいつでも必ず誰かがいて、温かく迎えてくれる。これは、誰でもが期待することである。

2008年度からは開館日を週4日から週6日に増やし、いつものメンバーがあたたく皆さんを迎えることができるよう正会員3名がボランティアから職員となりました。

その決断あってか、施設や里親家庭で暮らしていた方の来館頻度や問い合わせが増えました。・・・毎日のように顔を合わす仲間ができ、日々の出来事をおしゃべりしたり馬鹿騒ぎをしたりたまには真剣な話をしたり、そして一緒に食卓を囲み、「もしかしたら家族ってこんなものなのかな」と感じることができました²³⁾。

5月某日「修理でお休みかと思っていたのに、明かりがついていたのでとても嬉しかったです。ご飯だけ食べに来たみたいで失礼しました。とても楽しい時間でした」(大和) (「ハローノート」「日向ぼっこ」訪問者記録)

5月某日「代表が風邪をひきました。たまにはしっかりと休んでください」(友亮) (「ハローノート」「日向ぼっこ」

訪問者記録)

これらの記述から、退所者はあたかも自分の家に帰るように、いつでも無条件に自分の存在する場所があるという安定感を求めていることがうかがえる。

Ⅳ 考察と課題

社会的養護の退所者が居場所に何を求め、どのように得ようとしているのか、これは社会的養護の退所者が何に着眼して記述し、発言するのかということから推測できる。社会的養護の退所者が記述し、発言した発行物、資料等を整理すると、興味深いことが3点見出された。

まず1点目は、Ⅲ・1「団体の概要」で記したように、それぞれに異なる内部事情にもかかわらず、社会的養護の退所者によって居場所に求められているものが、3団体ともに類似していたということ、そしてそれが得られる過程も類似していたということである。求めているものとは筆者がⅡ・3で提示した5項目であり、それを満たす過程は居場所における他者との対等な理解しあえる人間関係によって促進されていた。

何度か公で自分の話を語る機会があっただいぶ整理が付いてきている気がします。今回は、日向ぼっこのメンバーだけでのスピークアウトで安心して話せたように思います。発表するための準備を通してあらためて自分と向き合うことになりました。……人に語るまでの自分との葛藤と、語ってからの周りの反応を気にしていました。それは、きっと普段は、絶対言っても理解してもらえないという思い込みや不安があるためかもしれません。また、メンバーのスピークアウトを聞くことでより相手を理解することができたように思います。こういったことは、普段の生活の中で友人などの対人関係の中で気が付かないうちにおこなっていることであると思いました²⁴⁾。

2点目は、社会的養護の退所者がかかわる団体とは異なる当事者団体(例えば親の会、患者の会など)とも共通する項目があったということである²⁵⁾。そ

れは、①情緒的支援 ②日常的・手段的支援 ④解決すべき課題や取り組みへのエンパワーメント である。

多くの当事者団体の実態を整理したA・H・カットは、非12ステップに分類される当事者団体の特徴として、①認知の再構築、②適応技術の学習、③情緒的サポート、④個人的な開示、⑤社会化、⑥一体的活動、⑦エンパワーメント・自己信頼・自尊心をあげている²⁶⁾が、これらを社会的養護の退所者が居場所に求める項目と比較したところ共通点が明らかになった。(表Ⅱ)

(表Ⅱ) 当事者団体の機能比較

社会的養護の退所者が求める機能(項目)	非12ステップに分類される当事者団体の機能
①情緒的支援	③情緒的サポート ④個人的な開示 ⑥一体的行動
②日常的・手段的支援	②適応技術の学習 ⑤社会化
③生活の共有感	
④解決すべき課題や取り組みへのエンパワーメント	①認知の再構築 ⑦エンパワーメント・自己信頼・自尊心
⑤安定した存在場所と良好な人間関係の確保	

3点目は、社会的養護の退所者には居場所に求める固有の要求があるということである。それは、一言で言えば家庭の代替機能である。③生活を共有していると感じていること、⑤安定して存在できる場所が確保されており、そこに自分を理解してくれる人が必ず居ることである。生活を誰かと共有しているという感覚や、それが継続するという安定感を生み出すには、家族によって保証されるような、生活上のケアと人間関係の存在を必要とする。安定した自分の存在の拠り所となる場所が求められているのであろう。

児童養護施設退所後の18歳の4月から寮付きの介護療養型病床群で働き始めました。施設から離れた初めての夜は、寮でもひとりで物音がまったくなく静かでした。その静けさに「これからはだれにも頼らずひとりで生きていくのか」と思い孤独感と寂しさで涙がとまりませんでした。「泣いていてもしかたがない。明日からがんばるぞ!」と自分で自分を励ましひとりで生きていく決意を固めた夜でした²⁷⁾。

社会的養護の退所者が求める固有の要求は、A・H・マズローが「人間は所属の欲求を含む基本的要求が満たされて初めて高次動機と呼ばれる自己実現に向かう」と定義しているように²⁸⁾、また、岡村重夫が、人間が人間として生きていくための「社会生活の7つの基本的要求²⁹⁾」の一つに家庭的安定をあ

げているように、家族関係に恵まれない社会的養護の退所者にとっては重要な基本的要求である。安定した自分の居場所が保証されて初めて、マズローの言うさらに高次の欲求の充足、あるいは、一人の人間としての自立へ向かうことができ、また前述した久保絃章の述べる「従来の専門的組織や専門的援助を問い直す」という活動、言い換えれば、当事者の立場から発言したり、提策提言を行ったりすることも可能になるのだと考えられる。

社会的養護の退所者が居場所に求める固有の要求を充足するために、如何に社会的に取り組んでいくのが、今後の居場所活動の課題であろう。

注

- 1) 相澤仁, 世施設退所後の年長児童への新たな支援策, 社会福祉研究, 103号, 鉄道弘済会, 2008, 48頁
- 2) 社会保障審議会児童部会「社会的養護専門委員会」報告書, 2007, 7頁
- 3) 杉山千佳, 子どものいる場所とは何か, 現在のエスプリNO457, 2005, 至文堂, 30-31頁
- 4) 高塚雄介, 心理学から見た『居』場所, 田中治彦編, 子ども・若者の居場所の構想, 2001, 学陽書房36-50頁
- 5) 萩原建次郎, 子ども・若者の居場所の条件, 田中治彦編, 子ども・若者の居場所の構想, 2001, 学陽書房, 63頁
- 6) 糸賀一雄, この子らを世の光に, NHK出版, 2003, 92-94頁
- 7) 村瀬嘉代子・重松正典・平田昌子・高堂なおみ・青山直英・小林敦子・伊藤直文, 2000, 居場所を見失った思春期・青年期の人々への統合的アプローチー通所型中間施設の持つ治療・成長促進的要因ー心理臨床学研究, 18, 221-232頁
- 8) 佐治守夫・岡村達也・加藤美智子・八巻甲一, 1995, 思春期の心理臨床ー学校現場に学ぶ「居場所づくり」, 日本評論社
- 9) 岡村季光, 2004, 青年期における居場所の意味, 第35回自己意識研究会発表資料, 田島彩子, 2000, 青年期の心の居場所, ー居場所感覚と抑うつ感ー, 日本心理臨床学会第19回大会発表論文集, 258頁
- 10) 伊藤正哉・児玉正博, 2005, 自分らしくある感覚(本来感)と自尊感情がwell-beingに及ぼす影響の検討, 教育心理学研究, 53, 74-85頁 北山修, 1993, 日本語臨床の深層第3巻ー自分と居場所ー, 岩崎学術出版社, 39-47頁
- 11) 則定百合子, 2006, 思春期における「こころの居場所」の関する研究, 神戸大学発達科学部紀要, 13, 17-22頁
- 12) 秦彩子, 2000, 「心の居場所と不登校の関連について, 臨床教育心理学, 26, 97-106頁 田島彩子, 2000, 青年期の心の居場所, ー居場所感覚と抑うつ感ー, 日本心理臨床学会第19回大会発表論文集, 258頁
- 13) A.H カッツ, 久保絃章監訳, セルフヘルプ・グループ, 岩崎学術出版社, 1997, 28-41頁
- 14) 久保絃章, セルフヘルプ・グループの理論と展開, 中央法規, 1998, 39-53頁
- 15) 小川幸裕, 「福祉拠点」に関する研究ー地域における子どもの「居場所」づくりの事例からー, 北星学園大学大学院論集9, 2006, 40頁

- 16) 網野武博, 人間としてぬくもりのあるかかわりの再生を, 子ども家庭福祉情報, Vol.15, 1999, 日本子ども家庭総合研究所, 2-4頁
- 17) 「C V V ・ PARC 交流事業報告書」2005, 48頁
- 18) 「児童養護施設退所児童の追跡調査」(東京都社会福祉協議会)2004, によれば退所する子どもの9割以上が課題行動をもち, その内訳は「人間関係等」(70.5%), 「経済観念」(53.5%), 家事等生活技術 (37.2%), 「情緒的問題」(37.2%)であった。
- 19) NPO 法人社会的養護の当事者団体日向ぼっこ, 2009, 「日向ぼっこ」と社会的養護, 明石書店, 50-55頁
- 20) 「C V V ・ PARC 交流事業報告書」2005, 97頁
- 21) 尾崎新, 対人援助の技法, 誠信書房, 1997, 145頁
- 22) 「CVV ・ PARC 交流事業報告書」2005, 96頁
- 23) NPO 法人社会的養護の当事者団体日向ぼっこ, 2009, 「日向ぼっこ」と社会的養護, 明石書店, 48頁
- 24) NPO 法人社会的養護の当事者団体日向ぼっこ, 2009, 「日向ぼっこ」と社会的養護, 明石書店, 40頁
- 25) 石川到覚・久保紘章, セルフヘルプ・グループ活動の実際, 中央法規, 1998
- 26) A・H・カッツ, 久保紘章監訳, セルフヘルプ・グループ, 岩崎学術出版社, 1997, 28-41頁
- 27) NPO 法人社会的養護の当事者団体日向ぼっこ, 2009, 「日向ぼっこ」と社会的養護, 明石書店, 128頁
- 28) A・H・マズロー, 人間性の最高価値, 誠信書房, 1973, 351頁
- 29) 岡村重夫, 社会福祉原論, 全国社会福祉協議会, 1983, 78-82頁